●宮崎宮（日向）

鵜葺不合尊及神武天皇を奉祀せる官幣大社宮崎神宮は、宮崎町の北牟里大宮村字下北方船塚に鎮坐す、神武天皇東征後建弊立命九州總鎮守たりし時此地に至り、舊都の跡に就きて社を創建せしを初めとし、崇神、景行、應仁の朝に於て屢々宮殿建營を爲し、其後歴代の國主地頭皆な之を崇敬し神武宮と稱し來れるを明治に至りて宮崎神社と稱され八年八月國幣大社に進み、十一年五月宮崎宮と改稱し十八年四月官幣大社に昇格、三十二年新たに社殿を造營せり、社前に立てる官幣大社宮崎宮の石標を見、華表を入りて人家蕭疎なる間を過ぎ、老樹鬱蒼たる境内に入れば正殿は四方に高欄を繞らし、前に渡殿を隔てゝ幣殿あり、其横に神饌所あり、幣殿の階前別に拜殿あり、構造總て上代の建築を旨とし、清楚にして壯嚴人をして自から襟を正さしむ、蓋し縣下第一の大社なり。

靈蹤地に關して日向見聞錄の記する所に依れば『神武宮は下北方村に在り、即ち天皇の生國本栖の宮蹟なり、此地の名を神武原と言ひ、又船塚と言ひ、天皇東征の日御船を繫ぎし所と傳ふ、又此村に内裡跡と名くる處あり、杉木數株を植へて之を穢さず、皆な上代の靈蹤なり』云々又一書には内裡跡を經塚と稱す、土俗地震に當りては經塚々々と絶叫す、經塚は地震も搖動し能はざれば即ち之を唱へて壓勝するなりとあり、經壇記中には『我日向州宮崎郡者、神武天皇舊都也、相傳、天皇從窟、浮船來此地、鰐魚爲之導、鰐駐而船纜焉、因相地營營、鰐所駐、今變爲陸、曰鰐壇、船所纜喜、曰船壇、有祠焉、投鐺處、曰鐺隨、營宮之地、曰經壇、遷都以來殆三千年、宸跡變易、爲荆棘、然數十歩、人不敢樹藝焉』云々と記す。

落合　雙石

高穹降神武　東海始天皇　一代風雲會
萬年星月煌　開基欽跡古　遺廟仰功昌
來往謳歌滿　春秋鼓笛長　老姿杉木翠
新粉竹林芳　樵採童皆避　拜瞻民自威
蜻蛉形欲極　禾穗瑞無量　可想垂洪統
源源並浩洋

●榎原神社（日向）

鵜戸神宮と祭神を同ふし、其社殿宏壯を以て聞ゆる榎原神社は、南那賀郡南郷村榎原に在り、地は飫肥町油津港の間一嶺を隔てたる溪間にして、南郷川に包擁せられ、又國内三良港の一たる外之浦に近接せる所なり。

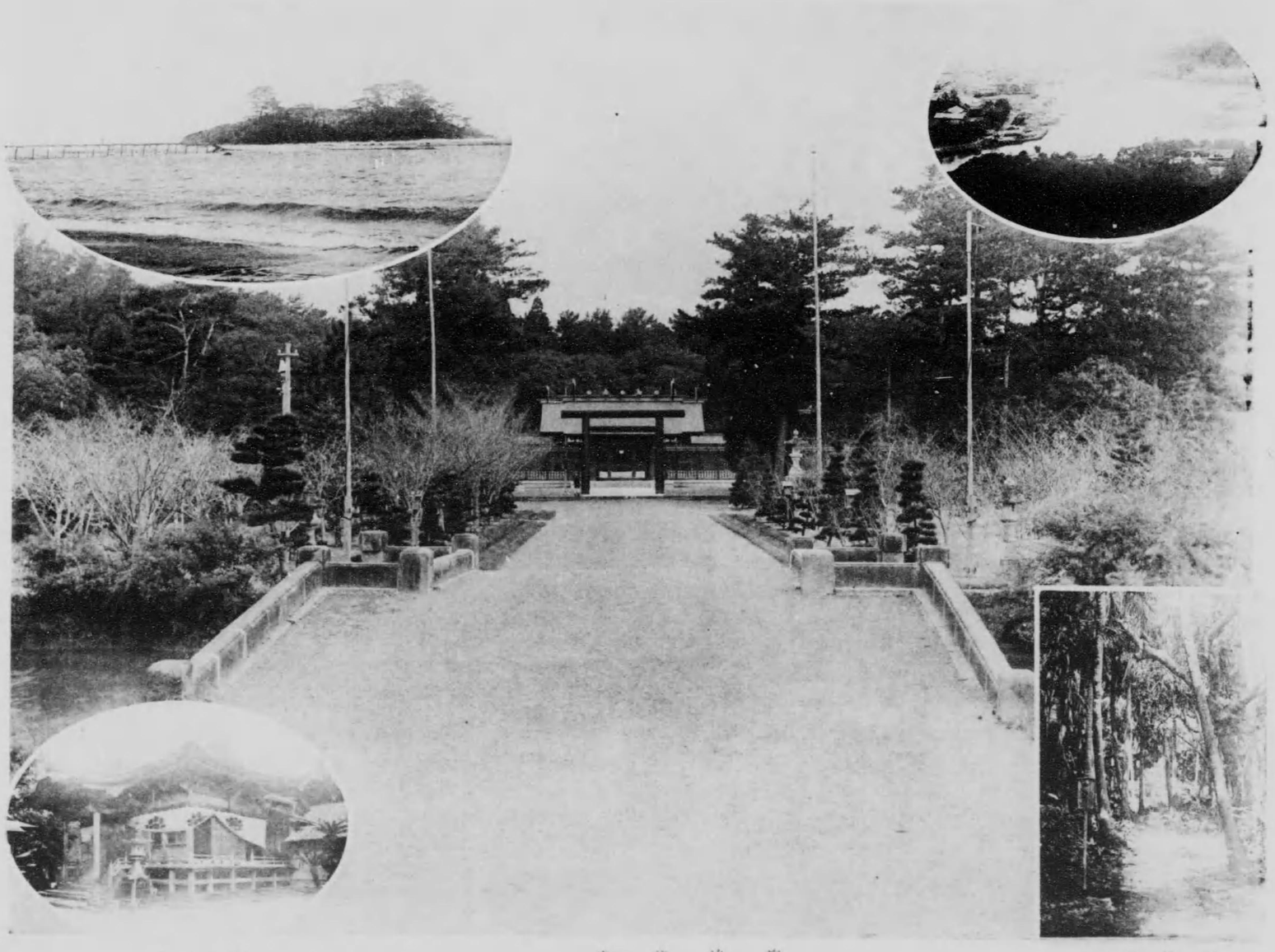
因みに南那賀郡の中央に位する飫肥町は、縣下南部の一名邑たるに背かず、明治維新前は伊東氏五萬七千石の城市にして、戰國時代に在りては屢々島津氏を惱ましたる豪族伊東氏の根據地たりき、城址は酒屋川に臨み今猶殘存す。

伊東祐國當年の優勢を概言せば、文明十六年祐國兵を都於郡より出して島津領の飫肥を襲ふ是れ島津より飫肥城に居らしめたる新納近江守と櫛間の領主伊作式部大輔とが不和なりしより起れり、翌年三月祐國又七浦より攻擊し楠原に陣を構ふ、六月十二日島津忠昌鹿兒島より纜を解き、其夜敷根に船を寄せ十三日末吉に着陣、十八日總軍都城を發す、時に飫肥城は累卵の狀に陷り新納の運命既に定れる際、島津家より大勢の後詰來りたれば、祐國縱横に之を破りたるも味方少數となり祐國遂に戰死す、其後義祐の時又兵を起し天文十年より引續き交戰せしかば飫肥城主島津忠親も今は力竭き、鹿兒島に急を告ぐること頻々、島津貴久大に之を患ひ二男兵庫頭義弘を以て忠親の養子と爲し、飫肥に往て忠親を助け伊東氏を防ぐべき旨を命せり、此事京都將軍に聞へ、永祿三年九月足利義輝より伊勢備後守を日向に下向させ、島津伊東兩家の和睦を謀る、此一事に由るも伊東氏歴代の優勢を知るに足る、後年義祐其紀行文中に『古戰場、今亡魂、南無阿彌陀佛、近里遠村零落し、野邊の秋風蕭索たり』と冒頭して當年激戰の事を偲べり、當時島津氏に對抗せる上城地、新山城地、伊東祐國墓等皆な此附近に在り。

●日向の青島（日向）

檳榔樹島の稱ある青島は、宮崎町を距る四里餘、折生迫の東北に當る海中に横はれる繪の如き小島嶼にして、干潮の時は一帶の沙路相通じ歩して以て渉るを得べし。

洸洋たる日向灘に臨める此島數里の礁は、岩礁襞を疊みて遠く羅列す、恰も麥圃の畦を觀るが如し之れ不斷の波の浸蝕に由りて夷らかに海に入れる陸地の斷層は疎鬆の土を洗ひ沙を濯つて、頑硬なる岩礁の骨のみを留めたるものなるべし、砂濱の端より島に架せる長き棧橋を渡れば前方に竹にあらず又蘆にもあらざる玄餘の植物蒼々として茂れるを見る、乃ち南洋の濱に多くありと聞ゆ蘆竹なりと言ふ此蘆竹林の陰には三尺に餘れる文球蘭の叢を成すあり、濱蔦羅の鍛を成すもあり、鬼籔蘇鐵なるもの亦多く、桐の一種なる火桐を始め其他の珍樹少なからず、殊に人をして驚異せしむるものは、周圍十五町と註せらるゝ此島山を蔽ふて生ひ茂れる檳榔樹の茂林は、蒼白色太き幹の節を襞みて矗然と高く立ち、大なる羽團扇の如き葉を重ね、蓬々として海風を煽ぐ狀は之を他に見るべからず、島中に產火々出見尊、豊玉姫尊及鹽筒命を祀れる青島神社あり、社後は又檳榔樹の深林にして其幾百株なるやを知らず、想ふに暖流の關係に由りて往古より此邊一帶此種の植物茂生せるを、久しき年間に伐採せられ、島中に在るものゝみ斧鉞の災を免れて保護せられたるものならん。



青島全景

内海港

檳榔樹

宮崎神宮

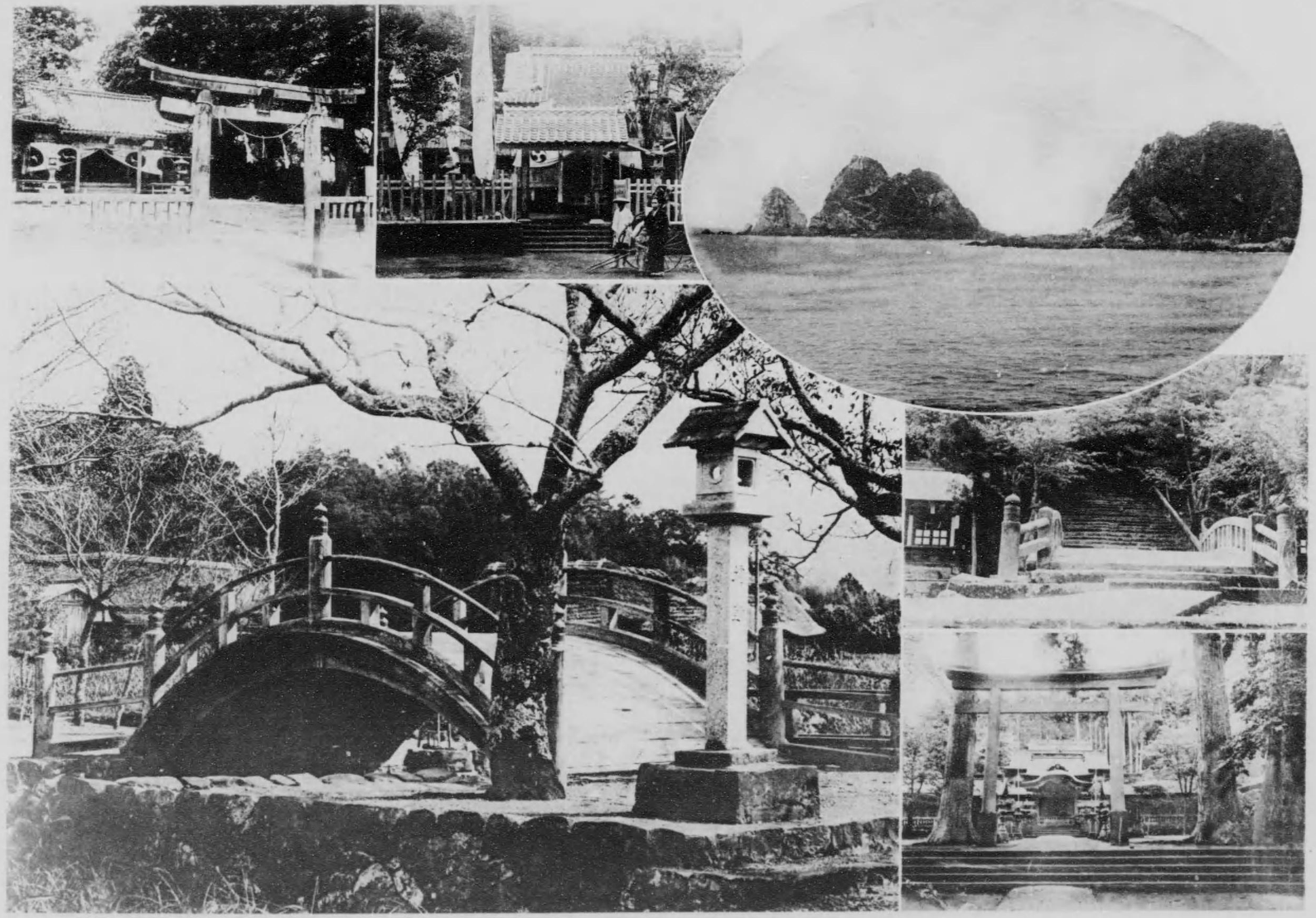
國幣神社

曰鄭墻、船所隙喜、曰船墻、有祠場、投鎔處、曰鎔鬩、營宮之地、曰經墻、遷都以來殆三千年、宸跡變易、爲荆棘、然數十步、人不敢樹藝焉』云々と記す。

落合　雙石

ひ二男兵庫頭義弘を以て忠親の養子と爲し、飫肥に往て忠親を助け伊東氏を防ぐべき旨を命せり、此事京都將軍に聞へ、永祿三年九月足利義輝より伊勢備後守を日向に下向させ、島津伊東兩家の和睦を

其幾百株なるやを知らず、想ふに暖流の關係に由りて往古より此邊一帶此種の植物茂生せるを、久しき年間に伐採せられ、島中に在るものゝみ斧鉞の災を免れて保護せられたるものならん。



都農一の宮神社

上ノ一圖圖

●都農神社と玉橋（日向）

高鍋を距る四里、兒湯郡都農村に鎮坐する國幣小社都農神社は、日向國一の宮

●生目神社と景清廟（日向）

生目八幡と稱さるゝ生目神社は、宮崎郡生目村龜井山に在り、瓊々杵尊、彦火

當社の薩摩大隅の神領凡二千五百餘町に及べりとの事、及び毎年八月十五日正宮濱下りの神事に當り騎馬武者二百六十人神輿に供奉せりとの吉例ありしと言ふ

●都農神社と玉橋（日向）

高鍋を距る四里、兒湯郡都農村に鎭坐する國幣小社都農神社は、日向國一の宮と稱せられ式内四坐の一にして大巳貴命を祀る。

神武天皇宮崎の宮を發し給ひて東國に向はせらるゝ時、御成効を祈らせられて齊き祀らせ給ひし社にして、延喜式内に於ても稀れなる舊社なりとは此社緣起に記する所なり、和漢三才圖繪には『都農大明神在兒郡宮村祭神一座大巳貴命號宮崎社』とあり、宮崎社の號は天皇親しく御鎭祭あらせられし故當時の帝都名に因みて斯く稱せられしならんか、爾來代々の天皇尊崇厚く就中神功皇后新羅御征討の際は神武天皇御征討の吉例に倣はせられんと、此大神を軍船に奉じて冥護を祈らせられしこと記錄に見ゆ、又仁明文德兩朝の御代に位階を奉られしことあり、往昔は境内も頗る廣かりしものと見へ、今一の華表二の華表等の名跡遠く離れたる地に存せり、現在の社殿は本社なる寶殿、渡廊下、祝詞殿、拜殿の外、攝社として素盞嗚神社、足摩手乳摩乳神社、末社には稻荷神社、熊野神社、愛宕神社の五社殿あり。

境内六千五百三十餘坪にして、所在地は恰も宮崎大分間の國道に接し、入口には三の華表ありて故久邇宮朝彦王殿下の揮毫に係る社號の額を掲ぐ、參拜道の兩側は老松鬱蒼櫻樹其間に交り、小流道を横ぎる所に反り橋を架す構造巧緻呼んで玉橋と言ふ、それより二の華表一の華表を經て社殿に至るまで亦老樹鬱茂して最も幽邃を極む、社殿の西方に在る林泉は九州一二と稱せらる、寶物中推古天皇の御宇秦河勝勅を奉じて奉献せりと傳ふる鬼面を始め刀劍古器物等少なからずと聞く。

●生目神社と景清廟（日向）

生目八幡と稱さるゝ生目神社は、宮崎郡生目村龜井山に在り、瓊々杵尊、彦火々出見尊、葺不合尊、譽田別尊等を祀れる縣社なり。

俚俗眼病に靈驗ありと稱し衆者常に絶へざる當社は又平景清賴朝を弑せんとし計成らず、此地に來り眼を抉りて復讎の念を斷ち、後遂に死す、景清の抉り出せる眼が生けるが如く見へたるより、眼病の神として祀れりと傳ふるも信ずべからず馬琴の景清外傳に『景清は日向の竹篠に終る』と見ゆる竹篠は同郡瓜生野村字竹篠にして、又景清及其女人丸の墓は大宮村下北方兒沙汰寺に在り、天保の頃一片の小碣高二尺餘なりしを、俗に此墓碣を削り粉末を眼中に擦り入れば眼疾治すと稱し眼疾者削り取りて去り、墓碣遂に形質を失はんとするより、村民相計り今は墓石を改造し屋宇を建つ。

●鹿兒島神社（大隅）

彦火々出見尊の高千穗宮址と傳へらるる鹿兒島神社は大隅國姶良郡西國分村濱之市の北十餘町字宮内に鎭坐す、一に大隅正八幡と呼び、古社中の一に數へらる。

昔時此方面を鹿兒島と總稱せる事ありしより今猶ほ社頭の南に鹿兒山と呼ぶ所あり。

鳴る神の山めぐりする絶間より
あらはれいづる秋のあま雲　　入道　龍伯

鹿兒島神社の末社なる四所宮と稱し來れる中に隼風宮、三之宮、雨之宮あり、隼風宮は日本武好熊曾魁帥を誅戮し給へる御劍を祭るとも言ひ、神代紀の所謂、迅風ならんとは地理纂考の記する所、三之宮は磯童豊姫火闌降命等、雨之宮は猿田彦神と見ゆ。

當社の薩摩大隅の神領凡二千五百餘町に及べりとの事、及び毎年八月十五日正宮濱下りの神事に當り騎馬武者二百六十人神輿に供奉せりとの吉例ありしと言ふに見るも、往古に於ける當社神事の壯觀盛裝を窺ふべし。

明治に至りて官幣大社に列し、又祭神彦火々出見尊の外應神天皇、仲哀天皇、神功皇后を配祀す、社殿は高爽なる地位に在り、宏壯偉麗頓る美觀を呈す、境内老樹蓊鬱として眞に太古の遺址たることを偲ばしむ、彦火々出見尊の海神より得しと言ふ千珠滿珠の玉と稱するもの寶物中にありと。

●霧島神社（大隅）

霧島山は大隅國姶良郡東襲山村の北嶺にして、大隅日向の州界に當り東西に二峰在り、其間三里に亘る。

東峰を高千穗と稱し西峰を西霧島又は韓國嶽と言ふ、天降川兩峰の間に源を發して南流す、此大嶽は噴火山にして其最高海拔五千一百尺と稱せらる、東峰は一に矛峰と言ひ西峰韓國嶽は之に比すれば稍々高きを加ふ、相並び立てるを以て高千穗二神之峰と言へり、官幣大社霧島神社は山の西麓に鎭座す、其社殿の壯麗縣下第一たり。

正殿には瓊々杵尊、彦火々出見尊、葺不合尊、伊波禮彦尊、を祭り、國常立尊、高皇靈尊、伊弉諾尊、天照大神を東殿に、大汝命、國狹槌命、惶根命、神皇靈尊、伊弉冊尊素盞嗚命、勝速日命の諸神を南殿に合祀す、殿内盡く朱塗金箔を以てし、殊に内殿は結構精緻、珠簾赫燿として神威の高きを覺へしむ。

因みに參拜路は國分寺驛より國道に分れ、郡田、大窪等の諸道を經て神社に達す、里程凡そ五里餘馬車の便あり。

島津齊彬筆

大久保利通筆蹟及誕生地

●城山と鶴丸城址（鹿兒島）

鶴丸城址は城山の麓に存す、古へは其城廓樓門偉大なりしと雖も、今は當年の面影としては僅かに樓門の跡と、高さ數丈の石垣を存する外、幅數間の壕及之に架せる橋を殘せるのみ、地は眺矚に富み前面に巍然たる櫻島山の錦江灣上に聳立するを望み、近くは市内大厦高樓の櫛比するを俯觀し、其間の港内には數百の汽船常に輻輳するを見る、遠く眼を放てば霧島山の翠岱、開聞嶽の峻嶺は一眸の下に集まり、全山繞すに老樹を以てす、幾百年間斧鉞を入れざる蓊鬱の森林盡猶ほ暗きを覺ふ、山後の狹谷は岩崎谷にして、南洲終焉の地たること別項記するが如し、鎮西の覇者たりし島津氏歴代の名城は、曾て幾たびか强敵を邀へて擊退し、南洲此名城址の狹谷に最後戰を試み、刀折れ彈盡き悠々終焉を告げたる地、今や公園となり公衆の遊ぶに任す。

島津氏居を鹿兒島に定めて始めて東福寺城を築きたるは南北朝時代に在り、是れ蓋し鹿兒島城の嚆矢とす、爾來清水城内城に移り更に鶴丸城に移れり、鶴丸城は一に上山と稱す、慶長七年之を修築し、爾來三百六十餘年此に居城し以て明治維新に至れり。

●祇園の洲と島津邸（鹿兒島）

文久三年六月二十六日英國軍艦七隻鹿兒島灣に進入し來り、生麥に於ける英人斬殺の罪を責めて償金三萬弗を要求す。

先是島津齊彬は豫め此事あるを察し、鹿兒島灣内沿岸の防備を嚴にし、彈藥兵器を調へて日々兵を練り以て來襲を俟てり、是に於てか償金要求の不當なることを說破して之に應せず、交渉數回遂に破裂となり翌七月二日正午互に宣戰を布告するに至れり、時に薩藩の防備は僅かに大砲八十門あるのみ、此日風雨極めて烈しく船の操縱甚だ困難と見るや齊彬『機以て乘ず可し』と號令す、此號令一下より臺場の砲門は一時に轟き、忽ちにして艦長ジョンスリングを殪し亞で大將ウィルモットを始め多數の水兵を斃せり、茲に喊聲湧き士氣大に振ふ、然れ共英艦も亦克く高瀾巨濤の中に操縱して應戰最も努め、彼れの巨彈市中に飛來して民家を燒く、兩軍亂射の砲聲は天に轟き地を撼かし、戰況容易ならざるより市民中他村に避難する者多きを見たり、薩軍の肉薄愈々急にして戰鬪艦の殄滅を見ずんば止まざらんとし、彼れの放てる砲彈に對して猛烈の抗戰を試みたれば、英艦遂に堪へ得ずして逃竄し一艦の如きは錨を拔くの間なく鋼を斷ちて倉皇遁走せり、薩軍海を探りて此錨を占領し凱歌を奏して其再來に備ふる所ありき。

齊彬此海戰に深く觀る所あり、彈藥砲彈の利鈍、彼我比すべくもあらず、又艦隊操縱の術頗る巧妙にして我れの及ぶ所にあらず之に加へて戰鬪長きに亘り、英本國の大艦大舉來り侵す時は到底我軍の對抗し得べきに非ざる事を察し、翌元治元年家臣に命じて横濱に至らしめ、幕府より三萬弗を借り之を英國に與へ事纔かに落着するを得たり、而して英艦は先に切斷して海中に捨てたる錨の返還を乞へり、當時萬國の法は錨を奪はゝを大恥辱とし、事平ぐの後には償金を出して購ふものたる事を聞知し居たるも、齊彬は此時何の要求もせず錨を與へたれば、英艦深く其高義に感じて本國に歸航せり。

此海戰よりして祇園の洲の名著る、洲は稍荷川の下流なり、此所より遠からざる田之浦の北方吉野村字磯に島津家別館『仙巖園』即ち磯邸在り、後に翠巒を負ひ前は櫻島に對し、西南は遙かに開聞嶽を望見し、煙波百里、風光秀絶、多く得難きの勝地たり。

●英邁の島津齊彬

島津家歴代の藩主は孰れも傑物なりしと雖も、德川幕府に於ける最も複雜時代即ち弘化より安政年間に介在して敏腕を揮へる一人は島津齊彬其人なり、齊　は修理太夫と稱し齊彬の長子にして久光の兄たり、通稱を又三郎と言ひ、將軍德川家齊の前に於て元服し其齊の一字を賜ふ、資性英邁常に心を治績に傾け德政世人に傳へられ『薩摩聖人』と稱せらる、弘化元年琉球に佛艦來航して通商を求む、此時齊彬未だ世子に過ぎざりしも夙に海外の情勢を究め鎖國の陋を破りて早曉開國の得策なるを覺れるを以て當時幕府の老中阿部正弘に謀る所あり、正弘又齊彬の議に同じ三年六月警備の任に當らしむ、之より齊彬邊海の防備を修し砲臺を築き武器製造所を設置し、治績着々として擧る、四年襲封して一層努力し、家臣に蘭籍を學ばしめ又反射爐を造りて實地の練習を爲さしむ、而して一面開國の意志を懷きしも時勢に制せられて其決行の時機を得ず、潛に阿部正弘に謀りて事稍や緒に就かんとして不幸正弘の卒するに遇ひて頓挫し、齊彬亦病を得て安政五年七月十五日薨ず享年五十歳して順聖公と言ふ。

●大久保利通誕生地（鹿兒島）

大久保は西鄕と誕生地を同ふし、亦西鄕と共に國家の重大事に當れり一は武を以て一は文を以て誠忠を致せる事世既に之を知る。

彼の征韓論破裂前までの兩人者は、渾身是れ誠を失はず、共に國事を談じ共に邦家の前程を案じたるに、會ま征韓論の破裂を見、兩者間に永久的城壁の築かれたるは千載の恨事なりき。

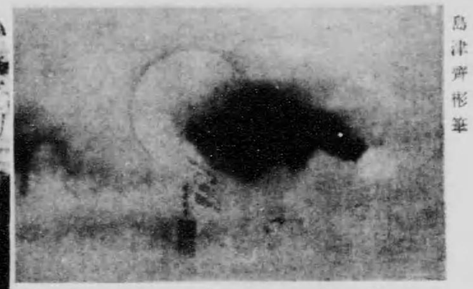
り、是に於てか償金要求の不當なることを說破して之に應せず、交渉數回遂に破裂となり翌七月二日正午互に宣戰を布告

る田之浦の北方吉野村字磯に島津家別館『仙巖園』即ち磯邸在り、後に翠巒を負ひ前は櫻島に對し、西南は遙かに開聞嶽を

邦家の前程を案じたるに、會々征韓論の破裂を見、兩者間に永久的城壁の築かれたるは千載の恨事なりき。

城山全景

鶴丸城址



島津齊彬筆

大久保利通筆蹟及誕生地

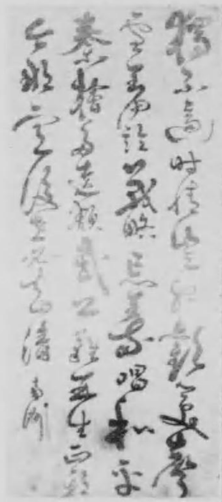
島津公留邸

祇園の洲

●岩崎谷洞窟（鹿兒島）

百戰無功半歲間。首邱幸得返家山。
笑傾向死如仙客。盡日洞中棋響閑。

鄉の大人物たるを知るべし、而して彼れが新政厚德の旗を樹つるに至れる動機、即ち征韓論を顧みれば彼れの大經綸は躍然として吾人の目に映じ來るの感あり、洞窟に在り、十九日に至り新たに一洞を掘り之に居る、奥行二間、間口一間餘、是れ實に最終の潛伏地にして亦終焉の所なり、洞口の左傍に左の二句を題しせり。

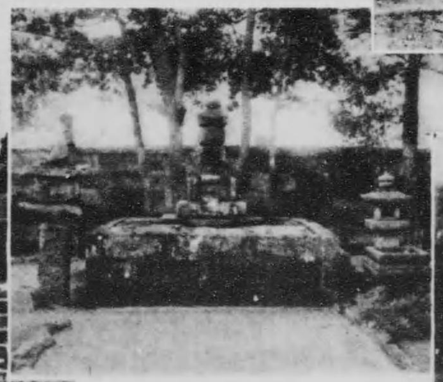


同　筆　蹟

同洞中西鄕隆盛潛伏記念碑

岩崎谷洞窟

西鄕隆盛以下諸將墓



月照上人墓

西鄕隆盛誕生地

●岩崎谷洞窟（鹿兒島）

百戰無功半歲間。首邱幸得返家山。
笑儂向死如仙客。盡日洞中棋響閑。

曩世の英傑たる大西鄉は新政厚德の旗を翻飜たらしめて幾多健兒と共に肥薩の野に激戰すること半歲、其戰、利あらずと見るや一旦鹿兒島に退却し、岩崎谷の洞窟に晏居數日、遂に泰然自若として終焉を告ぐ、此詩は即ち最後の大文字たり、結局の盡日洞中棋響閑に至りては誰か其膽大に驚かざる者あらんや。

抑も明治十年の役は西鄉以下征韓論の行はれざりしを憤り、冠を挂けて國に歸りし人々、時の政府に訊問すべき事ありとし、薩隅日三州の兵壹萬二千五百を率ゐて出發し、明治十年二月先づ熊本城を攻め圍み後官軍と各處に轉戰せるも遂に破れたれば、西鄉は麾下七百の兵を以て大に奮鬪し血路を開きて城山に還り此處に據りて守ること廿四日にして同年九月二十四日將士悉く此處に死せり、此間西鄉は悠々圍碁を弄し其死に臨むまで平素と異れる處なかりしと言ふ。

岩崎谷は城山の中間なる一囲地にして此に在る洞穴は何れの時に造成せるやを知る能はずと雖も、灰岩に堀込める高六尺横九尺餘のもの七八所今猶完存す、『南洲翁終焉之地』と刻せる二石及岩崎谷洞中記念碑立てり、谷の東北なる一丘陵淨光寺岡には西鄉以下を葬れる墳墓在り、大墳小墳相連り香煙縷々として絶へず、嗚、大西鄉の英魂は永く此地下に眠れり

征韓論の眞髓

島津齊彬嘗て松平春嶽と會話の際西鄉を評して曰く『我家臣多しと雖も大に用ゐべきもの殆ど稀なり、唯だ西鄉一人は貴重なる薩摩の寶なり、然れ共彼れは獨立獨行の氣象に富むが故に之を用ふる者は我れならでは能はじ』と此言に見て西鄉の大人物たるを知るべし、而して彼れが新政厚德の旗を樹つるに至れる動機、即ち征韓論を顧みれば彼れの大經綸は躍然として吾人の目に映じ來るの感あり、少しく征韓論に就て言はん。

思ふに西鄉江藤等が征韓論を主張したる所以のものは、主として對外政策を振作し、進取の國是を確立し、以て大陸經營の遠圖を畫し、覇を東邦に稱せんとするに在りしと雖も、内に於ては、之に由りて海外の民心を統一し、國威の宣揚と同時に内政の革新、國利の增進を圖らんとするに在りしことを疑ふべからず。

戊辰の役後中央政府の基礎漸く成立すると雖も、政府の内外に對する大方針未だ一定せざりしを以て、民心紛々歸する所を知らず、或は薩長の專權を憤りて政府を顚覆せんとする者あり、或は保守主義を主張して封建制度を復せんとする者あり、或は攘夷主義を主張して維新政府に反抗せんとする者あり、或は新政に反對して政體を一變せんとする者あり、或は君側の姦を掃蕩せんとする者あり、或は民權主義を主張して專制政治を一變せんとする者あり、而して維新以來當局者苟安を事とし、創業進取の精神漸く消し驕奢淫逸の風習益々甚だしきを加へ、文武官の御用商人と結托して醜聞を流す者亦少なからざりき、故に征韓論を機とし之に由りて内政を改革し、以て民心の統一を圖り其方鞱を一定し、之をして上下一致國運の發展を期せしむるは當時國家の最大急務とする所なりし也。

●南洲終焉の洞窟（鹿兒島）

西鄉は九月六日より十日まで野村邸の後に營る洞窟に在り、十日より十三日までは米苞を馬乘馬場鹿柴の前に積み、杉葉を以て其上に葺き僅かに雨露を凌ぎ、十三日より十八日までは再び野村邸後の洞窟に在り、十九日に至り新たに一洞を掘り之に居る、奥行二間、間口一間餘、是れ實に最終の潛伏地にして亦終焉の所なり、洞口の左傍に左の二句を題しせり。

籌策未成穴中夢　八洲民庶泣秋風

●南洲誕生の地（鹿兒島）

英雄大西鄉が呱々の聲を揚げたる地は鹿兒島市内加治屋町にして、此町は亦大久保利通を出せり、兩者誕生の地を同ふし交情頗る親密なりしも、征韓論に於て破裂せり。

●月照上人墓（鹿兒島）

鹿兒島市松原町に在る松原神社附近に月照上人の墓在り、繞すに石垣を以てし中央に小やかなる墓石を立て『靜溪院鑁水清月比丘』と題し裏には行年四十六歲と鐫られ、前面左右に二基の石燈籠を立つ、是等は平野次郎の建てたるものなり次郎は左右の燈籠に左の歌を刻して月照の靈を慰めり。

ながらへばとにかく命あるものを
　過ぎにし人の心短かき
ながらふも死ぬるも同じ大君の
　御國のためにつくす心は

月照は京都清水寺の住僧にして夙に勤王の志を懷き寺職を弟信海に讓り、近衛公の密旨を受け西鄉と共に志士の間に奔走して密議を凝しつゝありしが、幕府の是等志士を搜索すること急なりしかば、僕重助を伴ひ平野次郎と共に窃かに薩摩に入り、靜溪院鑁水と名乘りて隱れ居たれど、此地にも身を容るゝを得ず、安政五年十一月十六日西鄉と共に三船崎の沖に入水す、然るに月照死して西鄉は甦生せり、西鄉が菊池源吾として大島に潛伏せるは此時なりき、月照十七年忌に際し西鄉其墓前に臨み詩を賦して當年を偲び暗涙に咽ぶこと數時。

●鹿兒島市と櫻島（鹿兒島）

九州の南端たる薩摩國は、其北方の一部は八代海に面し一部肥後に接し、東北は日向大隅に境し、東は鹿兒島灣に臨み、西北は東支那海に連り、形勢南北に長く凡二十五里の長さに達し、東西の最大幅十三里餘に及ぶ。

鹿兒島市は縣の中央に位し、東は鹿兒島灣に面し、城山の丘陵は其西を劃り、秀靈なる櫻島の火山は其東に當りて、碧瑠璃盤上に屹立して相對す、慶長年間島津家久の此に移りてより五百有餘年、明治維新に至るまで地は島津氏歴代の城市として西海に覇を稱へ洵に鎮西の重鎮たりき、明治十年の亂、兵燹の爲めに市街全く焚蕩し、一時は殆ど焦土に變じたりしも、爾後歳月を經るに從つて漸次舊觀に復し、今は却つて其繁華舊時に勝るものあるに至れり、櫻島は鹿兒島市より海上二哩半、常に濛々たる白煙を噴き錦江灣上に大香爐を泛べたるが如き壯觀を呈す、之を鹿兒島市街より眺むれば其端麗なる島は穏波に搖られて漸次漂ひ來らんとする狀あり、圓形を成せる沿岸には古里、有村、臘、瀬戸、黒神、高兎、武村等の諸邑點在す、有村古里黒神の三所は溫泉湧出地なりしも、大正三年一月の大噴火より地形全く變じて當年の跡を見る能はず。

蕉衫如雪不受塵　長袖緩帶學都人
怪來健兒語言好　一擲南音官長嗔
蜂黄落、蝶粉褪　倡優巧、鐵劍鎗
以馬換妾髀生肉　眉斧解剖壯士腹

賴山陽

●可愛山陵（薩摩）

新田八幡宮として名ある國幣中社新田社は、薩摩郡水引村大字宮内の龜山に在り、天津彦瓊々杵尊を祀る、其一の華表は川内河の岸に在りて、之より坂路を上る二の華表まで三町餘、又之より坂の下三の華表まで三町餘、坂の下に忍穗井川ありて石橋を架す之を降來橋と言ふ、地理纂考の『宮内村可愛嶽の絶頂に在り』とあるは龜山即ち可愛嶽にして俗に八幡山と稱し來れり、社殿は初め山の半腹に在りしを承安三年炎上後絶頂に遷坐せるものなり。

社殿の背後は可愛山陵在り傳へて瓊々杵尊の山陵と言ふ、此可愛嶽と稱するも、嶽脈は西北傾山に連亘し、其南端は斗絶して長尾山と言ふ、北川祝子川の二流其左右を流れ、長尾の麓にて相會す、東海浦之れなり、此山は延岡の直北二里形狀雄偉なるを以て地方の鎮山と稱せられ、上に『可愛廟』あり是又相傳へて神代記の可愛山と爲す。

薩摩と日向とに在る此山陵傳說地に關し大日本地名辭書は曰く『偖此山陵に就きては古來異說區々なれば、先づ可愛山の名義より言ふべし、思ふに上古川内河は水引郷可愛山の川上より二つに分れ、一筋は今の如くにて、一筋は可愛山の麓を回り、五代村川合陵の邊にて又會流して、可愛山は上古中島なりし事知られたり、されば可愛山は江の山の義なり、後、入江の水を引きて其地を新墾せるより新多と言ひ、其水道を水引と號して今郷名となれり、此山陵を古事記傳に和名鈔、薩摩國穎娃（江乃）郡穎娃郷是也高城郡は穎娃郡と接きて此御陵の地古へは穎娃郡なりしが、今は高城郡に屬たるにやと言ふも彼の穎娃郡穎娃郷は可愛山より東南に距る事十七里餘にして、更に山陵には由無きなり、抑も可愛山陵は即ち今の新田宮なる事古文書に明かなるを、却りて世に異說の行はるゝ根元は、可愛山の傍に中陵端陵の二つの山陵ありて、社說にも其中陵を瓊々杵尊の御陵なりと唱へ又天書に『葬筑紫日迎緣之中山之巓』とあるを證として此中陵を可愛山の陵なる由白尾國柱が薩藩名勝考にも記せるより、其說に惑へる輩少なからず、新田宮は往古可愛山の半腹に鎮坐ありて、山上は御陵のみなりければ、更に惑ふこと無けむを、中世御陵の上に神社を遷されし後、異說も出來しなり』云々又曰く按ふに瓊々杵尊初め高千穗宮に御座まして、次に笠狹碕に遷り給ひ彼の所に崩御しまさむには御陵の地甚だ遠ければ、笠狹より又此所に遷り給ひ宮里などに大宮ありて、即ち此に崩御奉葬ありしにや、寳治元年文書に薩摩國遷後云々とあるは此地に遷都ありしを言ふに似たりと、記して以て考古家の斷案を俟つ。

●和氣清麿遺蹟碑（大隅）

大隅の國分停車場より約二里半の所に安樂溫泉あり、此溫泉に隣接せる犬飼瀑布は一に夕虹瀧とも言ふ、水源は霧島山中より來る中津川の上流なり、高さ三十間餘幅十間餘ありて、綠樹蒼鬱たる間に懸り其飛流巖頭より離れ、白浪碧潭に轟く所、煙霧を卷き霜雪を散ずるが如し、瀑の側、道路の上に『和氣清麿公遺蹟碑』在り又下流五六丁の川端に和氣溫泉ありて清麿常に入浴せる處なりと傳ふ。

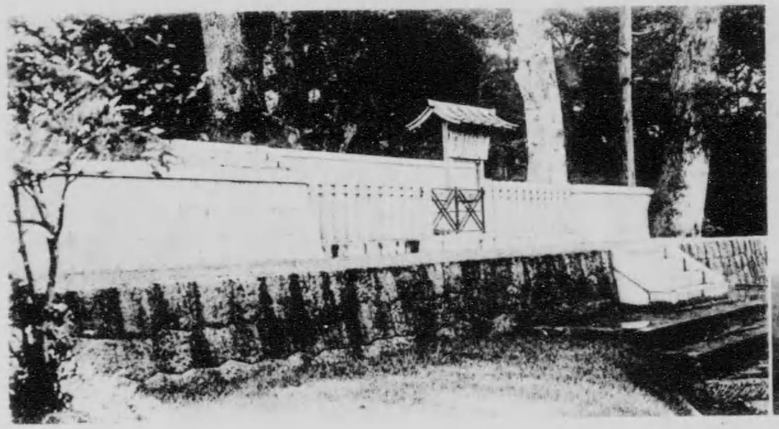
●對馬の嚴原港（對馬）

海軍の要港たる竹敷より南二里に位する嚴原は往昔國府を置かれたる所にして、又朝鮮釜山浦との互市昔より盛大を極めたる港なり、和船常に來り集まり市街最も殷賑、町の西南端に當る丘陵棧原に府中城址あり、國府址は近郊興良村に存し、清水山には豊太閤征韓の役に際し毛利に命じて築城せしめたる古城址も殘存せり。

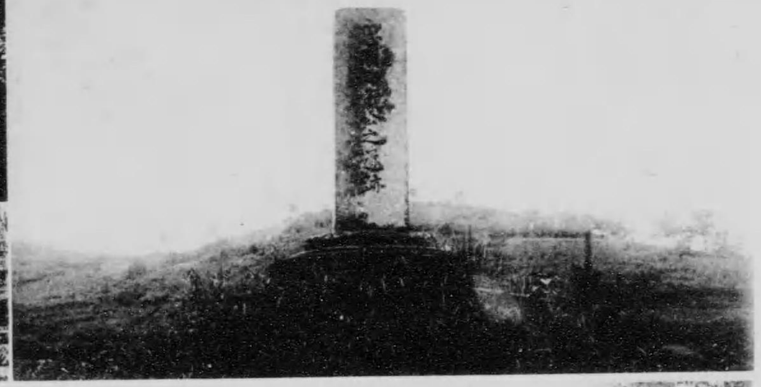
新田八幡宮として名ある國幣中社新田社は、薩摩郡水引村大字宮内の龜山に在り、天津彦瓊々杵尊を祀る、其一の華表

無きなり　扨も可愛山陵は即ち今の新田宮なる事古文書に明かなるを、却りて世に異說の行はるゝ根元は、可愛山の傍に中陵端陵の二つの山陵ありて、社說にも

に殆中城址あり　國府址は近郊興良村に存し、清水山には豊太閤征韓の役に際し毛利に命じて築城せしめたる古城址も殘存せり。



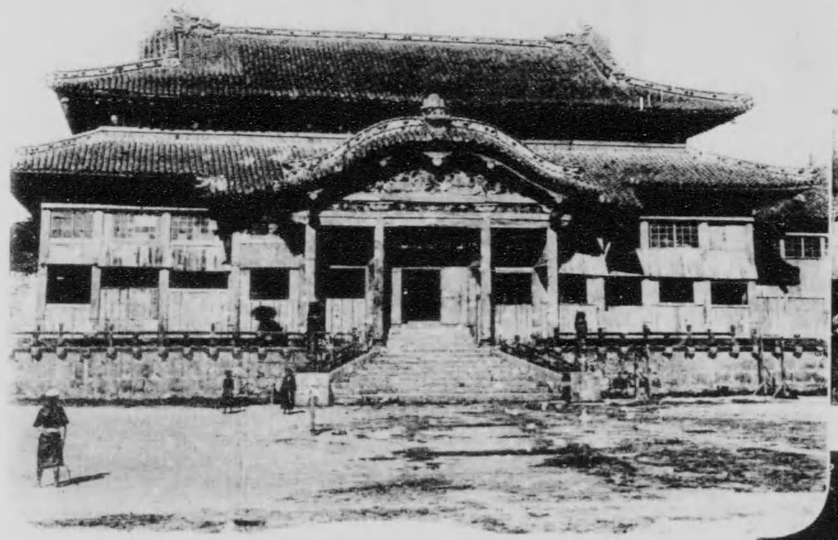
可愛山陵



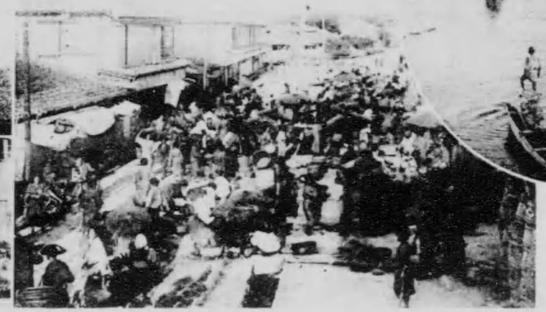
和氣清麿舊蹟

鹿兒島と櫻島

國府城址

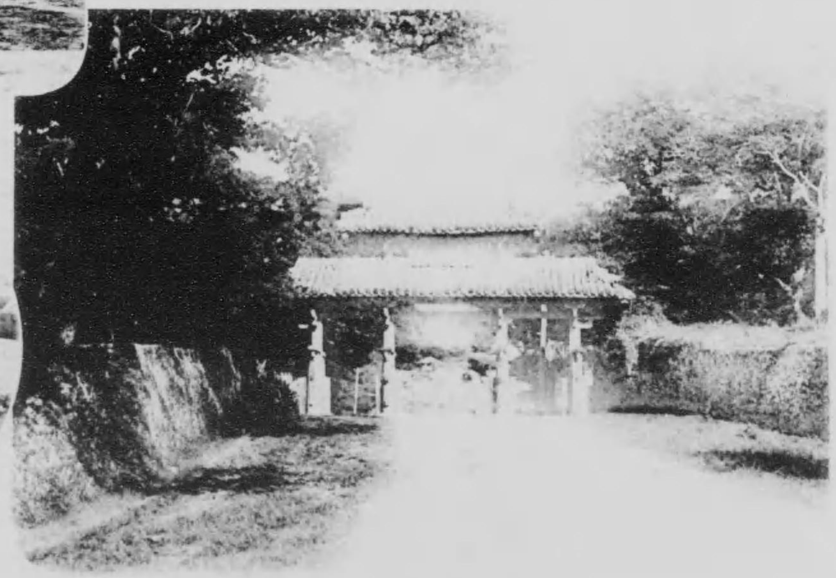


首里舊王城

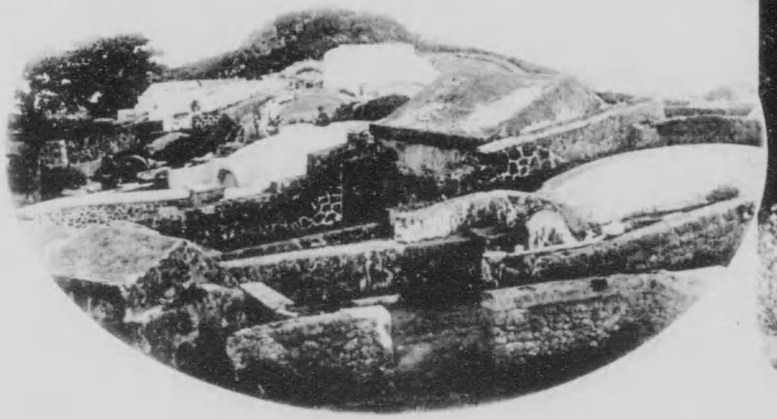


那覇市街

刳舟



首里守禮門



琉球人墳墓

上ノ一圖八

●那覇市街（琉球）

琉球全島第一の繁盛地なる那覇市街は島の西北隅なる那覇港に在り。而して市街は同港北岸一帶の地にして、街路平坦よりし、宮古諸島の刳舟は南門よりするの慣例となり居りしより此名あり。

那覇襍詠

眼中風物異東洲　伊知地貞馨
正是蜻蛉洲盡頭
全島人家三萬戶　各村蕉雨幾千疇

琉球人の墳墓は、辻山に多く存在す。辻山は西村字辻の沿岸に在る連崗を稱す支那人は玆を稱して青芝山と呼べり、島人の墳墓は皆な山に穴を掘りて造れり、然れども貴人の墳墓は別に押墓墓門を建

●那覇市街（琉球）

琉球全島第一の繁盛地なる那覇市街は島の西北隅なる那覇港に在り。而して市街は同港北岸一帶の地にして、街路平坦人家櫛比す。縣廳、裁判所、警察署、郵便局、病院等悉く備らざるなく、百貨輻湊して商賈常に殷賑を呈せり。本邦内地人の茲に移住するもの尠からず、市の巨商大賈は多くは内地人にして、薩州の人其過半を占む。又東村に市場ありて、日々數百の商婦鼓に群集し日用の諸物資を販賣す、而して其營業の光景は頗る奇異にして、商婦は各々大きなる傘を差し腰して各自露店を張る、恰も東京に於ける縁日飴屋の觀あり。由來那覇と言はず、沖縄地方は一般に男逸女勞の風習ありて婦人は日々勞務活動して業に親しむに引換へ男子は常に悠々閑居して煙草を喫し酒を飲み、平然として總ての供給を婦人に仰ぎ居れり。然れども其國風として同島にては何人も怪まざるなり。

那覇港は東西十九町、南北十三町、大小の船舶常に港口に輻湊し、沖縄縣下第一の埠頭たり、然れども港口の内外共に水甚だ深からず、且つ暗礁多く、潮水の干潮に從つて隱見出沒す、港内航路の中央に當りて一大巖石居然として横はれるが、該巖石は年々増大して行くと云ふ。頗る奇といふべし。是を以て巨舶大船の繫留甚だ不便にして汽船は慨ね港外に投錨せざるを得ず、萬一風濤烈しく來れば速に解纜して慶良間島に避くるを常とす故に該航路には標木を建てゝ出入船舶を保護せり。

港口の前面に淺礁五塊あり、此の五礁の間に三條の港路あり、北方を倭口と云ひ、中央を唐船口と云ひ、南方を宮古口と云ふ。往時船舶の那覇港に往來するものは北門よりし、支那の戎が商船は北門よりし、宮古諸島の刳舟は南門よりするの慣例となり居りしより此名あり。

那覇襍詠

眼中風物異東洲　伊知地貞馨
全島人家三萬戸　正是蜻蛉洲盡頭
鳶鴉無影中山地　各村蕉雨幾千疇
一望宛爲倉庫看　鴻雁不賓南海秋
同　同
蔗國芋畦數十程　墳塋纍々滿郊邱
蒼松高表舜天廟　林風吹滿葛衣輕
草木四時抽綠葉　粉壁遙連首里城
欲探奇勝供詩料　田家六月穫黄抗
同　同
暴風捲海怒濤奔　瘴氣横空日色昏
新社鄭船來泊港　前明遺族別成村
兵榔椰子遮沙徑　龍眼茘支傍石垣
良節佳辰追舊俗　詩聯均貼各家門

●首里舊王城（琉球）

舊時琉球國王累代の居城地として知られたる首里は那覇區の中央に位し、其の王城は巍然たる巨館にして之れを首里城と名つく。區内最高の丘陵に據り要害頗る堅固なり、周圍九町廣袤凡そ二萬坪に及ぶ、城は岳を削りて之を築き繞らすに外郭を以てし、且つ螺石を疊積して壁の如く爲したるを以て遠方より一見すれば恰も鬱鬱を聚めたるが如し、耳城の外、石崖の上、左方に龍岡と彫し、右方に虎華と刻す、城の四方には各々門を設け、前面の西に向へるものを歡會門と云ひ、東に向へるものを繼世門と云ふ、左に南向なるを水門と稱し右に北向するを久慶門と號く。門は更に門を設く、其數總て十一、守禮門は其中の一たり。此地高燥にして眺望に富み、東方には崎山を指呼の間に收め、脚下には那覇の全景を俯瞰すべし。此城今は第六師團沖縄分遣隊の兵營となれり。

●琉球人の墳墓（琉球）

琉球人の墳墓は、辻山に多く存在す。辻山は西村字辻の沿岸に在る連崗を稱す支那人は茲を稱して青芝山と呼べり、島人の墳墓は皆な山に穴を掘りて造れり、然れども貴人の墳墓は別に押臺墓門を建てゝ標識せり遠く之れを望めば恰かも橋門の如し又本州人の墓地は若狭町村に在り。

●刳舟（琉球）

俗にうつろ舟と云ふ、自然の木を抉り穿ちて舟としたるものにて、一に獨木舟とも云ふ、宮古島にては多く此の刳舟を用ふ、宮古島より那覇に入港するもの一切他の船舶を用ゆることなく總て刳舟なりと云ふ。

因に曰ふ。宮古島は沖縄、八重山と共に琉球を形成せる三大島の一にして、那覇の西南百八十七海里の洋中に在り、地形略ぼ三角形を爲し周圍十一里七丁あり純然たる珊瑚島にはあらざるも、全島殆んど珊瑚岩より成れり。島中殆んど野原のみにて小丘なく、從つて河流に乏し故に水田を設くる能はざるのみならず飲用水をも得ること甚だ困難なり。家財の如きは悉く之れを那覇若しくは八重山島に仰ぐ。

宮古島の北方數里の海中に八重干瀬と稱する一大礁あり長さ八里幅二里に達す外國船往々にして此礁に觸れ大破せるもの尠からず航路實に危險なりと云ふ。島の四邊には巨船を碇泊すべき良港なきを以て那覇より來る汽船は兩岸張水浦と稱する不完全なる一港に碇泊するを常とす島内砂川間功西里村に宮古島役所、警察署、高等小學校等あり。て比較的諸般の設備整ひ該村は東仲宗根西仲宗根、下里、荷川取の五村を總稱して平良又は五ヶ村或は單に五箇と稱す、島内最も繁盛の地なり。

大正九年七月二十日印刷
同　年同月二十二日發行

編纂兼發行人　東京市四谷區花園町五十三番地　瀨川光行

印刷人　東京市小石川區西江戸川町二十一番地　佐々木俊一

寫眞技師　東京市神田區元佐久間町十番地　槇田眞盛

發行所　東京市四谷區花園町五十三番地
「史蹟名勝天然記念物」刊行會
電話番町一五八八番

印刷所　東京市麹町區紀尾井町六番地
「史蹟名勝天然記念物」編纂局
電話九段九一六番

416
6

4

終